



福井県文書館企画展示

# 福井藩士の記録



平成22年10月29日(金)▶12月23日(祝)

〈休館日〉月曜日、11月4日・24日、12月16日 〈開館時間〉9:00~17:00 入館無料

福井県文書館 FUKUI PREFECTURAL ARCHIVES

# 鈴木主税あての書簡集 「遺愛帖」



## 鈴木主税ってどんな人？

鈴木主税(1814-56)は、1845年(弘化2)以降側頭取・側給役などを歴任。春嶽を補佐し、交流のあった水戸藩の藤田東湖からもその才能を絶賛されましたが、病をえて江戸で急死。鈴木は、また橋本左内の能力を見出して慶永に推挙したともわれています。城下本町の町民が寺社町奉行時代の仁政に感謝し、生前から徳直神社を創建して崇拝するなど、領民からも深く敬愛されていました。



「遺愛帖」 個人蔵 当館寄託 X0148-00001

主税の養子重弘が、父あての書簡を貼って折本に仕立て「遺愛帖」と名付けました。乾・坤・艮・巽の四角からなり、中根雪江がその序文を記し、春嶽が題字「五絶」(五つの優れたもの)をうまっています。

## 「現代語訳」(意訳)

一書拝呈いたします。暑い日が続きますが皆様ぞろぞろとお元氣のこととお喜び申し上げます。(こちらも皆元氣なので)「ご安心ください」。

さて、東北の大事件(八月三日のペリー艦隊の来航)にはほんと肝をつぶさんばかりでした。そちら(福井)でもどんなに歯ざしりし、怒り嘆いていることかとつわさをし、想像しております。もし、奇策妙案があればお知らせくださいますようお願いいたします。

元来昨年(嘉永五年)から、今年には(ペリー艦隊の)船が来ることはオランダ人から内々に話があり分かっていたことです。ところが何の備えもせず、結局のところ話し合いだけで大砲の一発も撃たず、予定の行動とはいえあまりにも無氣力です。すでに異人達中もそのことを見すかしているのは何とも口惜しく、憤りを抑えることができません。

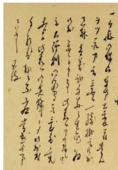
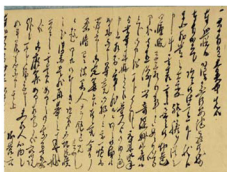
写真は、江戸にいた福井藩医平井仲庵から福井の鈴木主税あてに出された手紙です。半井は、幕府、老中阿部正弘が前年(嘉永五年)からオランダを通してペリー艦隊の来航を知っていたにもかかわらず、何一つ手を打てなかったことに対して非常に落胆しています。一方でアメリカ側の通商希望について警戒感を示すなど、国の行く末に対し半直に自らの考えを示し、医師でありながら甲冑を新調し、ことと次第によっては立ち向かおうと意気込んでいる様子が見ええます。

また、こんな大事のさなかにあっても、鈴木が冷静に状況を判断して三国に向き、一万二千両の資金を調達したことが大評判となっており、このように現実的な判断ができる鈴木に江戸に来てほしいと結んでいます。

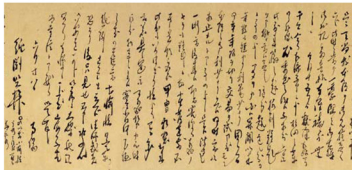


# 半井仲庵は？

半井仲庵 (1812-71) は、福井藩の藩医 (蘭方医) です。1857年 (安政4) から済世館教授。62年には子の子澄、橋本綱常 (左内の弟) と共に長崎に遊学しました。



(中略)



(中略)

半井仲庵書状 (部分) 1853年 (嘉永6) 6月28日 個人蔵 当館寄託 X0148-00001

異國船はきつと再びやってくるはずで。その時はどう対処するのでしょうか、朝廷のお考えはどのようになるのか、さまざまな憶測が人里乱れて一向に人心が落ち着きません。

(中略)

天がわが国を見捨てないのであれば、この(困難な)時に豪傑の大将が出現するよに祈るほかはありません。今月十五日からアメリカ大統領フィルモアの国書の(翻訳)が始まっていますが、もって作業が全く進まず。杉田(成輝、蘭学者玄白の孫)も毎日京城しているとのことですが、もっとも詳しいことはわかりませんが、今回の書翰は特別無理難題をいつてきていることはなく、ずいぶん趣意はわかりやすいというところで。アメリカは建国以来日が浅く、役立つも少なく困っているのです。何とか年限を区切って試みに交易を試みて、もし日本に利益が少ないならはいつてもやめると言っているようですが、これは彼らの策略で、後々どのような書があるか計り知れません。

さて、私は福井を免つ前に御配慮をいたさ(江戸に来てから)新しく甲冑を作りました。今やこの甲冑を身につけるような状況ですが、このようなときに自前のものがないようでは助すしかない限りですので、おかげで甚だ心地よく、本望に感謝いたします。いざとなればおそれ(相手に)背は負せない覚悟であり、どうかが安心ください。おついでの際に大崎氏にもよろしくお伝えください。申上げたことはまだまだささいますが、それは次回のお手紙にいたしたく存じます。恐々頓首

六月二十八日

南陽

(中略)

純和製契

今般(福井)の御城下では江戸の大事件(ペリー艦隊来航)の時貴君は急を聞きつけて三国へかけつけ、一万二千両の金手を調達されたといことですが。こちら(江戸)でもそれが伝わって大評判です。留守(福井)を守ってほしいのですが、それよりはごちからに先鋒としてお越し願いたく存じます。なかなか折り合いがつかず当惑千万です。不備

# 青山小三郎の在京応接記録「上京中日記」



「上京中日記」 青山小三郎関係文書 国立国会図書館蔵



## 青山小三郎って？

若くして藩校明道館に勤めた青山小三郎（1826-98）。目付としておもに他藩との応接にあたり、將海舟と西郷隆盛の最初の会見（1864年9月）にも立ち合いました。



## 中根雪江は？

側用人・中老としてつねに春嶽の側近くに仕え多くの記録を残しました（1807-77）。



「大日本維新史料稿本」 東京大学史料編纂所蔵

# 中根雪江 幻の記録「枢密備忘」

坂本龍馬が神戸海軍塾の資金借用のため、福井にやってきたのは、文久三年（一八六三）五月の二十日前後。その直後から、福井藩では横井小楠・三國八郎（由利公正）などを中心に大評議が始まり、六月はじめには、春嶽父子を先頭に藩を挙げて上京、その圧力のもとで会議を開き、懸案の開鎖問題（開国か、鎖国か）を解決しようという大計画をたてました。そしてその実行の機会を探るため京都に派遣されたのが、村田巳三郎と青山小三郎です。

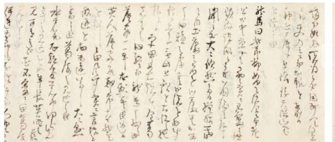
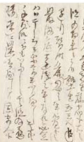
この「上京中日記」は青山が記した記録で、薩摩藩を通じた開国派公家工作など、緊迫した京都のようすを伝えています。

春嶽の活動・業績を記録した「被再夢紀事」は記事ごとに出典が明記されるなど、史料価値が高く、幕末期の貴重な資料として、戦前から活字化され、広く利用されてきました。

同書の文久二年（一八六二）十二月五日の条には「堀邸後土藩間崎鉄馬・坂下龍馬・近藤次郎来る、公対面せられしに大坂近海の海防策を申立たりき」とあります。この春嶽と龍馬の出会いの記録は、多くの人びとに引用されていますが、情報が限られていることから、様々な解釈がなされてきました。

ところでこのほど、明治末から昭和戦前期にかけて編さんされた「大日本維新史料稿本」（四二五冊）が公開され、インターネットから誰でも閲覧できるようになりました。この「稿本」は各地の開連資料を借覧して歴史項目ごとに抜粋筆写して編さんしたもので、中根雪江の執務日記「枢密備忘」も重要資料として引用されています。この「枢密備忘」





の姿をほうふつとさせます。

このほか、ここには載せられませんが、村田と話し合って決めた江戸への使いを、都合で近藤親次郎から沢村惣之丞に替えたいと了解を取りに来た記事（七月四日条）があり、龍馬が仲間と共に、福井藩と協力しながら、日本を「洗濯」しようと動きはじめている様子が見えがえします。

いて興味深いのですが、ここでは勝海舟の代理として、福井藩のために情報を提供する龍馬の姿に注目しましょう。

写真には、將軍を順助丸で江戸に送るため、大坂を離れた勝の代理として、十五日に京都の福井藩邸に現れた龍馬の言動が記されています。● 奉兵上洛を企てた老中格小笠原長行の暗殺計画を持ちかけてきた長州人を龍馬が説得したこと。赤馬関（赤間関・下関）で始まった長州と米英などとの戦争についての龍馬の意見。大坂湾に突如現れた英国軍艦の対処法について、守備にあたる因幡藩からの相談に適切な指示を与えたことなどが記されています。

続いて● 龍馬がどうして春嶽公の登京がないのかときりに詰問するので、『御国論』（挙藩上洛計画）を聞かせたところ大喜びで、● その考えは全く葛（勝）先生の考えと同じであり、龍馬にもそういう位置していたと龍馬の言葉を記録しています。薩摩や水戸の風聞についての「葛殿見込」も記されており、自分の考えを交えながら「勝先生」の代理として、福井藩と堂々とわたり合う龍馬

「忘」は「続再夢紀事」の編さんにも利用されていますが、その後所在不明となつてしまった幻の記録といえます。

そこで、各歴史項目に分散して引用されている「樞密備忘」の記事を目付ごとに整理し復元を試みると、文久二年十二月に限っても次のような事がらが新たにわかりました。

すなわち、龍馬たちは、● 前日四日に面会の予約をしていること。● 九日にも訪問したが、春嶽には逢えなかったこと。● 同様に面会を希望した土佐藩の武市平平太は、日をかけて面会は許されたが、御目見えだけで、直接意見を言上することはできなかったこと。とくに長州の高杉晋作、桂小五郎も日をかけて頼み出していたが、ともに春嶽には面会できなかったことなどです。それだけに、直接「御達有之、大坂近海防禦之策を申立」ることができ、さらに「至極尤成筋三御聞受被遊」との春嶽の感想が残されたこの日の龍馬たちの会見は、記録した中根雪江にとっても特別なものであったことがわかります。このほか、龍馬・近藤の名前が山下・坂下、「空・白」・長次郎・親次郎とそれぞれ変化しており、少なくとも記載した中根にとつては、この時まで両者が馴染みでなかったことがわかります。さらに勝麟太郎を通じて、親次郎に金十兩渡されていることも、龍馬たちと福井藩の関係をj知る新たな事実です。

## 復元「樞密備忘」

坂本龍馬と福井藩関係記事（文久2年12月）

- 朔日 一長州高杉晋作来り横濱約論有之
- 四日 一上州岡崎馬島・山下龍馬・（空・白）御達龍馬出洋海船願也、明晩を約す
- 五日 一武市平平太并今晩御目付付寄、御達龍馬御物御用二付所相成
- 六日 一御達龍馬之、山下・相相馬山岡崎馬島・坂下龍馬・近藤長次郎（御達有之、大坂近海防禦策を申立候事）至極尤成筋三御聞受被遊
- 六日 一今御目見え武市平平太（御達有之、御取次政有之）見已二面会難者嶋田近江（坂下）
- 八日 一桂小五郎龍馬、尾老公之事、封州之事、小嶋之事、嶋田近江及内諒由
- 九日 一坂下龍馬、近藤親次郎龍馬出、建白書一封指上之
- 十一日 一土州人來、取込居候付不違、春嶽（橋井・斎藤（外九郎））へ指廻し道又十四日
- 十四日 一近藤親次郎大と暴発を招れ、同志供供（勝嶽龍馬）之由
- 十五日 一近藤親次郎、先日米除忌不少、貧乏之儀、何と云々金十兩下候、勝麟太郎相成
- 十五日 一親次郎横濱・勝嶽、推来候、悪客三人許在候二付、論解二て為引取候由、又横公を弄らん和船根三二親在候者共也、追々人を遣し是亦為引取手空之由

## 関義臣の探索記録「風説書」



## 関義臣って？

府中本多家家臣の家に生まれ、福井藩校明道館・幕府昌平坂学問所に勤めました。元治元年（1864）10月以降は、藩の探索方も務め、長崎に出て、亀山社中・海援隊にも参加したとされ、印象的な龍馬像を書き遺しています（1839～1918）。



「風説書」松平文庫 福井県立図書館保管

福井藩の藩政史料群である松平文庫（県立図書館保管）には「風説書」が六冊あり、文久三年十月（一八六三）頃から慶応元年（六五）三月頃にかけて、福井藩の探索方などが集めたさまざまな情報を書き留められています。とりわけ、この冊子（写真上）は中扉に「竜次郎差出ス」とあり、ほとんど山本龍次郎（後の関義臣）によるものと思われる。

このなかに、元治元年（一八六四）暮、突然の江戸召喚により軍艦奉行を罷免された勝海舟を訪れて、先に幕府に売り渡した福井藩の蒸気船黒龍丸の売渡金をめぐって、勝に余計な疑惑がからまないよう相談した際の報告書があります。写真左はその一部で、突然の江戸召喚で金銭的にも困った勝が「現在大坂町奉行に預けてある、昨年福井藩から借りた五百両はかりのうち、三百両をあらためて借借したい」というのに対して、龍次郎は「この金については国許では最初から返済の当てはしていないはず」と答え、たことを報告しています。さらに続けて「何に使っても頓着しない、ほかに入用ならばいつでも国許へ言ってきたください」と言い置いたと報告し、また勝は尋常な方法では受け取らないだろうから、老公（春嶽）の思召として手許金から書生賄料（米二百俵ばかり）を贈ってほしいと頼んでいます。龍次郎はじめ福井藩関係者の勝海舟に対する特別な想いが伝わってくる部分です。

ところで、福井藩から借りたというこの五百両ですが、これは前年（文久三年）五月に坂本龍馬が借り出した海軍建設資金千両の残金ではないでしょうか。「海舟日記」によると神戸の塾建設費用は約四百両。同年七月には龍馬らが大阪町奉行に五百両を預けに来た事実（大阪町奉行から勝宛の手紙）から、借金千両から建設費などを差引いた五百両が龍馬らによって大阪奉行へ預けられ、それがそのまま残っていたと考えられるからです。

黒龍丸と海軍築を失い、さらに資金もとりくずされ、前年五月の資金貸出しの際に勝とともに龍馬や福井藩が描いた海軍構想は、ここであえなく頓挫してしまいました。

# 春嶽側近の執務記録 側向頭取の「御用日記」



春嶽の側近を監督する側向頭取が認めた執務記録「御用日記」は、春嶽が安政の大獄によって隠居・急度慎に処せられた翌年の安政六年（一八五九）正月から慶応四年（六八）七月までの十年間にわたって一六冊が残されています。

起床の時刻や体調、登城等の時刻や装束、従った家来の氏名、食事の場所や行事の際の饗応、家族の動向、来訪者とその接遇、手紙の発着や贈答の記録、入浴・就寝の時刻まで、春嶽の日常の詳細が日なみに記録されています。

たとえば、龍馬がはじめて春嶽に出会った文久二年（一八六二）十二月五日はどんな一日だったのでしょうか。起床は五時（午前八時）。神仏に拝礼した後すぐ袴で江戸城へ登城。衣冠に着替えて勅使に対応しました。この時、政事総裁職であった春嶽は、攘夷督促のために入城した三条実美らに終日対応しており、勅使の宿舎であった「御馳走所」に寄ってから五時（午後八時）に常盤橋藩邸に帰殿。このあと大奥で食事をすませた夜遅くに龍馬ら三名と面会したのでした。

●春嶽は御座間の二の間まで出座し、龍馬と岡崎哲馬・近藤長次郎は隣接する溜間の敷居際までまかりでて、お会いになったとあります。

また、翌三年二月二十七日の条には、●前々日に脱藩を赦されたばかりの龍馬に対して、春嶽の手許金から一五両の「御手当」が、側用人中根頼負（雪江）を通して渡されたことが記されています。

このように、「御用日記」には側向頭取という特別な職務の性格により来訪者との話の内容は記されていませんが、誰とどのような配置で会い、その際どのような接遇がなされたかが詳しくわかります。春嶽をめぐる様々な人物との交流を記録した貴重な資料です。

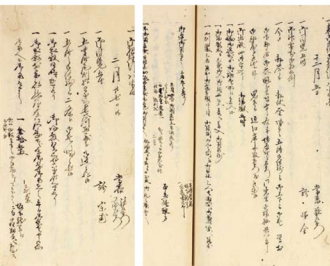
## 「側向頭取」の仕事は？

春嶽の側近にあり、その日常にかかわる側向は側近役につき要職でした。千円費用の管理や小姓頭取・小姓などを監督しました。



「御用日記」

松平文庫 福井県立図書館保管

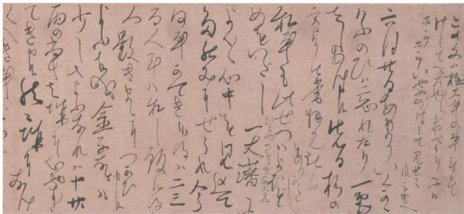


▲② 文久3年2月27日条

▲① 文久2年12月5日条

幕末維新期の福井藩士は、国政に奔走した松平春嶽の業績をあきらかにするために『昨夢紀事』『再夢紀事』『続再夢紀事』などの記録を残しました。これらは、いずれも同時代の書状や日記に基づいた信頼性の高いものであり、現在でも維新期の基本資料となっています。

しかしこのほかの記録の中にも、これらを補い、新たな事実を教えてくれるものは少なくありません。この展示ではこうした福井藩士の知られざる未刊行資料を紹介します。



坂本龍馬書状(冒頭部分) 1863年(文久3)6月29日 坂本乙女宛 重要文化財 京都国立博物館蔵

「一大藩に信頼されて二、三百人をあずかり、十、廿圓の金は容易に融通できる」と、福井藩との緊密な関係を誇る乙女に自慢するこの手紙では、「外国に通ずる幕府の義吏を一掃し、二、三の大名や旗本たちと手を合わせて、日本を洗滌したい」と龍馬の抱負が語られています。

この同じ日、龍馬は村田巳三郎(福井藩士)にこの考えをもちかけ、激論の末、近藤長次郎を江戸に遣わすことを決めています。福井藩が大名(鳥津・鍋島・細川)との交渉を開始するのにあわせて、龍馬たちが江戸の旗本たちを受けもとうとしたのでしょう(『続再夢紀事』)。

何の後ろ盾も持たない龍馬が「一人の力で天下うごかすべきは、是又天よりする事なり」と書いたのもこの手紙でした。



表紙の肖像写真は、松平春嶽・中根雪江・藤澤舟(福井市立郷土歴史博物館蔵)、坂本龍馬(高知県立歴史民俗資料館蔵)、近藤長次郎(高知市立市民図書館蔵)、青山小三郎(国立国会図書館蔵)、岡義昭(個人蔵)。資料は、『遺愛帖』(個人蔵)、『上京中日記』(国立国会図書館蔵)、『風流書』(美術向銀貨館日記) (松平文庫 福井県立図書館蔵)。

## ◆展示説明会・県史講座のご案内

平成22年11月3日(祝) 11:00～、14:00～

文書館職員による展示説明会

平成22年11月13日(土) 13:30～15:30

県史講座「文久3年の龍馬と福井藩」

講師：吉田 健(福井県文書館古文書調査専門員)

会場：福井県立図書館 多目的ホール

※県史講座は申込み不要です。

## 利用案内

### ■ 開館時間等

午前9時から午後5時まで 入場無料

### ■ 展示期間中の休館日

月曜日、11月4日(木)・24日(水)、12月16日(木)

※フレンドリーバス(無料)をご利用ください。



## 福井県文書館企画展示パンフレット 平成22年度

平成22年10月29日発行 編集・発行／福井県文書館

〒918-8113 福井市下馬町51-11

電話 (0776) 33-8890 FAX (0776) 33-8891

文書館HP <http://www.archives.pref.fukui.jp>

E-mail [bunshokan@pref.fukui.lg.jp](mailto:bunshokan@pref.fukui.lg.jp)